島根大学教育学部紀要（人文・社会学）第７巻　97―108頁　昭和48年12月

食物の嗜好傾向と性格に関する研究（IV）

藤　江　　奏*・猪　野　郁　子*

Susumu FUJIE and Ikuko Ino : Studies on the Relationship between One's Taste for Food and Personality (IV)

I　目　　的

近年，生活水準の向上に伴なって食生活も豊かになり，栄養面においても不足の時代から過剰の時代へ移りつつあると言われている。そして，それに附随して肥満児の問題が大きくとりあげられるようになってきた。肥満の原因としては素質だけではなく，家庭環境，親の養育態度，食生活の状態，運動量などいろいろの要因が関与していると考えられるが，肥満ということは医学的な面からだけではなく，心理的，教育的な側面からも検討されなければならないであろう。われわれはこれまでの一連の報告(1)～(3)において，食物嗜好と性格の間にある種の相関関係が存在することをみとめたが，今回は肥満児，細長児について食生活を中心にしてその実態を調査し，かつ食物嗜好および性格との関連を検討した結果，若干の知見が得られたので報告する。

II　調　査　方　法

調査対象は島根県松江市における三つの大規模小学校（津田小学校，城北小学校，内中原小学校）に在籍する３学年から６学年までの全児童合計1967名およびその保護者（主として母親を対象とした）である。

調査時期は昭和47年７月から12月までの間である。

家庭環境および食生活実態調査は質問紙を保護者に配付し，解答記入後回収した。嗜好度の調査および性格検査は前報(3) に準じて行なった。なお，回収率は93.8%であった。

回収された資料は，それぞれの児童について算出されたローレル指数（ＲＩ）によって細長児，普通児，肥満児の三群に分類し，比較検討を行なった。

*　島根大学教育学部家政研究室

Ⅲ 結果および考察

1 体型分布

全児童についてその体重，身長からＲＩを算出し，その分布をみたのが第１表である。

肥満児，細長児には種々の判別法があるが，本調査においてはＲＩを用いる方法によった。そして，ＲＩによる判定にもいろいろの説があるが，こゝでは160以上を肥満児，100以下を細長児とする方法をとった。この基準によると，肥満児の出現率は松江市においては1.63%となった。肥満児の出現率は市部と郡部を比較すると市部において高いと言われ，同じ基準による別の調査[4]によると，東京都千代田区では2.7%，青森市や松山市では1.3%位になっており，松江市の場合では東京より低いが，青森や松山よりやや高い値を示した。しかし食生活水準が著るしく変化する現状では，調査時期を異にしているので断定することは無理であろう。

第1表 児童の体型分布

ＲＩ		100以下	101～110	111～120	121～130	131～140	141～150	151～160	161以上	計
男子	人数	16	120	329	282	150	56	19	16	988
	%	1.62	12.15	33.30	28.54	15.18	5.66	1.92	1.62	100
女子	人数	15	125	316	300	137	49	21	16	979
	%	1.53	12.77	32.28	30.63	13.99	5.01	2.15	1.63	100
計	人数	31	245	645	582	287	105	40	32	1,967
	%	1.57	12.45	32.79	29.59	14.59	5.34	2.03	1.63	100

細長児の場合はＲＩを100以下とする説[5]と，100以下ではあまり少数になりすぎるので肥満児と比較するためには108以下位にするのか良いとする主張[6]などがあるが，本調査では100以下とする説をとった方が肥満児とほとんど同じ出現率（1.57%）を示すので，この群を細長児群とした。

一方，肥満児および細長児の出現したクラスから，ＲＩの平均値（122.5）になるたけ近い値を有する同性の児童を同じ人数だけ（したがって普通児群の人数は肥満児数と細長児数の合計となる）えらび，これらを普通児群とした。

肥満児の出現率は一般に女子の方が男子に比べて高いと云われているが[7][8]，小学校段階ではほとんど差がないという報告[9]もある。本調査においては，第１表に明らかなように，細長児，肥満児とも性別による出現率の差異はみとめられなかった。

2 両親の体型との関連

細長児，普通児および肥満児の三群における両親の平均身長，平均体重および平均ＲＩを示すと第２表の通りである。

第２表　細長児，普通児，肥満児群における両親の体型

両親	体型	男子			女子		
		細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
父	身長（cm）	165.1	165.6	164.6	164.5	166.5	164.7
	体重（kg）	56.9	59.5	61.3	63.2	59.0	60.8
	ＲＩ	127	131	137	142	128	137
母	身長（cm）	154.3	153.9	153.8	152.0	153.7	153.8
	体重（kg）	47.4	49.1	57.8	48.3	49.8	56.0
	ＲＩ	129	134	158	138	138	168

肥満の素因の一つに遺伝性が考えられており，両親または一方が肥満している場合に，肥満児が多く出現していることはわが国でも知られているが[10]，本調査の場合男女とも父親とはほとんど関連がみとめられず，これに対して母親の肥満は児童に大き影響を与えていることが，有意性をもってみとめられた。これは純然たる遺伝的要因によるものか，あるいは食生活面においては母親の占める位置が高いので，それが児童に影響をおよぼすことになるのかについては明瞭でないので，今後の検討課題にしたいと思う。

一方，細長児の場合でも親子の体型に関連があるという報告[5]もみられるが，今回の調査ではそのような傾向を裏付ける結果は得られなかった。

以上の結果から，親子の間の体型にはっきりした関係がみられたのは，肥満児とその母親との間だけであった。

3　食　習　慣

家庭における子供たちへの食習慣に対する態度が肥満児あるいは細長児の出現にどのような関係をもたらしているかをしらべたのか第３表である。

第３表　食事に対する家庭のしつけ（%）

しつけ態度	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
なるたけたくさん与える	6.2	13.3	0	9.5	6.7	11.1
欲しがるだけ与える	37.5	11.7	20.0	33.3	19.7	27.8
好きなものだけ与える	10.2	5.0	0	14.3	5.0	0
嫌いなものも無理に与える	12.5	8.3	6.6	4.8	10.0	11.1
食べ残さぬよう注意する	75.0	70.0	63.3	76.2	68.3	38.9
家族中心に献立をつくる	56.2	48.3	46.7	47.6	56.7	44.4

第3表によれば，『欲しがるだけ与える』という項目が細長児群においては他の群に比べて高い値を示している。これはそれぞれの家庭においては，体格が劣っていることを気にして食事をたくさん与えようと努めていることが想像される。このことは子供たちの日常の食物摂取が少ないことを裏付けるものであろう。一方肥満児の方も，普通児に比べると男女とも高い値を示している。これは食欲のある子供に『欲しがるだけ与える』結果，食物摂取が過剰になり，それが肥満につながるのであろうと推察される。したがって，食欲がありすぎる子供，あるいはすでに肥満している子供には，肥満の予防・治療の意味からも『欲しがるだけ与える』という態度は厳につつしまなければいけないと思われる。

『好きなものだけ与える』という項目も細長児群においてかなり高い値がみられた。これは家庭では何とかして食べさせようとする気持ちのあらわれと考えられる。そしてそれは子供たちの食欲のないことを裏付けるものであろう。これに対して，肥満児群においてはそのような傾向が全くみられなかった。これは食欲が旺盛なため，そのような努力の必要が全くないことを推測させる。したがって，子供があまり食欲が無いからと云って『好きなものだけ与える』というような安易な考え方では身体発育が不充分になる恐れがあるし，一方何でも食べるから食べるだけ勝手に与えるという放任主義も肥満につながる恐れがあるということに注意しなければいけない。もちろん，これは後に述べるように偏食の有無ということにも大いに関連があると思われる。

『食べ残さぬ様注意する』という項目もやはり細長児に多く，肥満児には少ない。これも細長児においては食欲の少ないことを裏付けるものであろう。

以上のような結果から，細長児群あるいは肥満児群では，食物の摂取量にかなりのちがいがあるように推察される。摂取する食物の質や量は習慣により大部分が決定されると云われている。子供はまた仲間のまねをするので，食物の好みも摂取量も家族に似てくるとも言われている。肥満児の栄養摂取は一般に多すぎるという報告[11]があるが，細長児の場合はその逆の傾向がみられるので，いずれにしても病的な身体症状を防ぐには，日常の食習慣を常に監視して，正しい方向に導いてゆく努力が必要だと思われる。

4　偏　　食

前項において，食習慣には偏食の有無がかなり影響するのではないかと思われたので，家庭における子供たちの偏食の状態について調べてみた。その結果，偏食を有する割合は，細長児においては男子53.8%，女子66.7%，普通児では男子65.0%，女子65.0%，肥満児では男子33.3%，女子38.9%であった。すなわち細長児，普通児では男女とも約三分の二が偏食傾向を示しているのに対し，肥満児群では男女とも約三分の一にすぎなかった。このように肥満児群では好き嫌いが烈しくないということが，第3表にみられるような結果をもたらすものとも考えられる。偏食が無いということは，かたよった栄養状態を防ぐという意味では好ましいことであるが，今日のように食物が豊富に求められる時代においては，それを良いことにして子供の

要求するまゝに食物を与え，よく食べることは健康につながることだという考えは，肥満という面から考えるとき，充分注意しなければいけないことであろう。なお，細長児の場合は，普通児に比べて偏食が多いという傾向はみとめられなかった。

5　主食および間食について

児童のカロリー摂取で問題となるのは食事（特に主食）の量であると言われている[11]。そこで本研究でも主食と間食について調査を行なった。

主食は学校給食を除いた朝夕二回についてしらべた。なお，その際の計量単位としては御飯何杯，パン何枚という表現法を便宜的に使用した。その結果，パンは予想よりも摂取量が少なくて比較の対象になり得なかったので，こゝでは省略した。

間食については，『与えない』と解答したものは全くなく，『時々与える』というのも極めて少数で，大部分は『毎日与える』という解答であった。そしてこゝではその量的な検討は省略し，間食の種類についてしらべてみた。その結果は第4表に示す通りである。

第4表　主食，間食の摂取状況

主食および間食		男子			女子		
		細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
主食	米飯(杯)	2.4	2.4	2.7	2.3	2.4	2.7
間食 (%)	飲物類	35.9	35.0	37.1	30.5	32.9	38.2
	果物類	29.0	28.4	28.5	34.2	30.3	27.1
	パン・菓子類	29.0	30.2	28.5	34.2	32.9	30.2
	めん類	4.5	2.8	2.2	0	1.3	3.3
	その他	1.6	3.6	3.7	1.1	2.6	1.2

第4表によれば，米飯は細長児群，普通児群ではほとんど差はなかったが，肥満児群では男女とも高い値を示し，有意差がみとめられた。したがって主食の摂取状態は肥満と密接な関係があるものと確認された。細長児群では全く普通児群と同じであった。

間食については，飲物類，果物類，パン・菓子類が大体同じ位の割合で与えられているようである。これは最近の消費水準の向上により，間食と言っても食事の補足という意味は少なくなって，むしろ嗜好品的与えられ方になってきていると考えた方が良いようである。このことは飲物類の中にコーラやジュースなどが多かったことからも想像できる。したがって，従来間食というとカロリー補足という要素が大きかったのに対して，最近ではだんだんその要素が小さくなってきていることを示している。もちろんこれらの飲物にもカロリーがあり，大量摂取は当然肥満にもつながる訳である。今回は量的な検討を行なっていないので決定的なことは言

えないが，間食として特に飲物類が増加している現在ではみのがせない問題であろう。

6　食物の嗜好傾向

肥満児は比較的偏食が少なくて食物摂取量も多いが，細長児はその逆であることが推測されたので，それが子供の嗜好にどのような関係にあるかを日常の主な食品について検討した。

穀類，くり，豆類，肉類および卵についての嗜好傾向は第5表に示される通りである。

穀類では全体的にみた場合，男子の肥満児において若干高い嗜好度を示すようであったが，有意差のみとめられたのは米飯およびマカロニであった。女子においては，肥満児か特に高い嗜好度を示すような傾向はみられなかった。さきの調査[3]では穀類に対する嗜好に関しては，男子にやゝ好まれる傾向がみとめられるので，過剰摂取につながると考えられている主食に対する嗜好は，男子の場合に関連が深いのではないかと思われる。

くりはいずれの群においても高い嗜好度を示し，男女差，群間の相異はほとんどみとめられなかった。

第5表　穀類，くり，豆類，肉類，卵の嗜好傾向

食品名	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
パン	3.89±0.81	3.85±0.84	3.94±0.73	3.80±0.71	3.68±0.81	3.43±0.65
うどん	4.21±0.71	4.10±0.93	4.11±0.76	4.00±0.91	4.17±0.81	3.93±1.14
スパゲティ	4.11±0.66	4.26±0.95	4.33±0.77	4.04±0.79	4.43±0.72	4.43±0.51
マカロニ	3.47±0.84	3.81±1.03	4.11±1.18	4.04±0.77	3.86±0.84	4.00±0.96
米飯	4.01±0.86	3.83±0.94	4.50±0.62	3.92±0.81	3.88±0.81	4.14±0.95
くり	4.47±0.77	4.37±1.04	4.33±1.03	4.48±0.94	4.65±0.55	4.46±0.78
落花生	4.37±0.68	4.12±1.06	4.33±0.97	4.33±0.76	4.23±0.93	3.54±1.20
えんどう	3.79±0.79	3.34±1.20	3.72±1.23	3.38±0.97	3.45±0.89	3.29±1.14
牛肉	4.27±0.70	4.15±1.20	4.44±1.04	3.88±0.93	3.92±0.95	3.21±1.48
豚肉	3.68±1.16	3.65±1.39	3.89±1.45	3.20±1.29	3.60±1.08	2.77±1.06
鶏肉	3.95±1.22	4.23±1.11	4.39±1.14	3.88±0.93	4.17±1.04	3.64±1.39
卵	3.89±0.81	4.12±0.92	4.35±0.70	3.44±0.96	3.97±0.78	4.21±0.80

豆類では，落花生が好まれる食品として高い嗜好度を示していたが，女子の肥満児群においては他の群に比して低い値を示していた。さきの調査[3]では落花生に対する嗜好にも性差がみとめられ，女子に比べて男子の方によく好まれる傾向であったが，女子の肥満児はその性差をはっきりさせているように思われる。

肉類は性差が明瞭にみられる食品で，男子の方に好まれることがわかっているが，男子においてはその特徴が肥満児の場合にとくに強くあられるようである。これに対して，女子では普通児に比べて細長児，肥満児群では嗜好度が低いようである。これは肥満児において特にその

傾向が強い。したがって肉類においては男女の性差による嗜好の相異が，肥満児群に明瞭にみとめられた。

卵は男女ともＲＩの上昇と共に嗜好度も高くなる傾向であり，特に女子の場合に明らかであった。

第６表は乳類，魚貝類，軟体類および甲殻類の嗜好度を示したものである。

乳類では，男子の場合アイスクリームを除き肥満児において高い嗜好傾向を示したが，細長児においては普通児とほとんど同じ値であった。一方女子の場合は，男子とは逆に肥満児にお

第６表　乳類，魚貝類，軟体類，甲殻類の嗜好傾向

食品名	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
アイスクリーム	5.00±0.00	4.87±0.43	4.88±0.33	4.84±0.47	4.80±0.48	4.50±0.76
ヨーグルト	4.42±0.84	4.62±0.69	4.76±0.44	4.60±0.58	4.38±0.90	4.71±0.61
牛乳	3.84±1.01	3.80±1.07	4.50±0.62	3.80±0.91	3.75±1.14	3.36±0.95
チーズ	3.82±1.33	3.71±1.13	4.33±0.84	3.68±1.19	4.12±1.03	3.29±1.27
バター	3.79±0.63	3.62±0.96	4.00±1.03	3.72±0.84	3.55±0.91	3.14±0.95
さかな	3.79±0.79	3.50±0.93	3.94±0.94	3.40±0.82	3.68±0.98	3.64±0.84
貝	3.63±1.12	3.85±0.92	3.50±1.38	3.43±0.84	3.62±0.83	3.71±0.91
いか	3.89±1.05	3.73±1.10	4.00±1.08	3.52±0.96	3.78±0.87	3.79±0.98
たこ	3.32±1.16	3.69±1.04	3.94±1.14	3.48±1.01	3.60±0.92	3.64±0.93
かに	3.83±1.15	4.15±1.06	4.11±1.23	4.13±1.08	4.33±0.71	3.93±1.14
えび	3.95±1.08	3.97±1.01	3.89±1.08	3.76±1.01	4.05±0.85	3.93±1.21

第７表　葉茎菜類，根菜類，いも類の嗜好傾向

食品名	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
ほうれんそう	4.32±0.82	3.78±1.01	3.72±1.07	3.72±1.02	3.81±0.88	4.14±0.77
キャベツ	4.21±0.86	3.58±1.03	3.79±1.18	3.60±0.91	3.78±0.83	3.86±0.86
たけのこ	4.05±0.91	3.23±1.23	3.65±1.22	3.44±0.92	3.64±0.94	3.64±1.28
たまねぎ	3.68±1.16	3.30±1.14	3.78±1.22	3.24±1.09	3.41±1.04	3.79±1.12
ねぎ	3.63±1.12	3.30±1.17	3.61±1.38	2.96±1.24	3.15±0.99	3.36±1.15
大根	3.63±0.89	3.33±1.16	3.33±1.28	3.44±0.65	3.38±0.87	3.29±0.91
ごぼう	3.74±0.99	3.36±1.00	3.13±1.45	3.40±1.12	3.44±0.91	2.93±1.27
にんじん	3.21±1.03	3.14±1.14	3.44±1.10	3.12±0.88	3.18±0.97	3.50±1.16
れんこん	3.23±1.18	3.05±1.31	3.07±1.21	2.82±1.14	3.12±0.98	2.54±0.97
さつまいも	4.42±0.69	4.05±1.03	4.39±0.78	4.00±0.76	4.17±0.74	4.14±0.86
じゃがいも	3.74±0.87	3.63±1.06	3.94±1.22	3.32±0.99	3.78±0.92	3.93±0.83
こんにゃく	3.68±0.89	3.43±1.31	3.50±1.34	3.44±0.92	3.36±0.93	2.93±1.14

いて全般的に低い嗜好度を示し，特にチーズではその傾向が顕著であった。さきの調査[3]では乳類の嗜好にも男女差がみとめられ，男子の方によく好まれている傾向であったが，肥満児の場合男子ではさらに高い値を示し，女子では逆に低い値を示した。すなわち歴然たる性差を示した。この傾向は肉類の場合と全く同じであり，嗜好度に性差のみとめられる食品では，その傾向の強いほど肥満と関係するのではないかと思われる。

魚貝類，軟体類，甲殻類においては男女いずれの場合においても三群間に著るしい差異はみとめられなかった。

葉茎菜類，根菜類およびいも類については第7表に示される通りである。

葉茎菜類では男子の場合，細長児が普通児に比べて高い値を示したのが特徴的であった。特にほうれんそう，キャベツ，たけのこでは肥満児群より高い値を示した。これに対して女子の場合は，有意差はみとめられないが，むしろ細長児群では低い値を示す傾向であった。葉茎菜類も嗜好に男女差がみられ，女子によく好まれる食品であるが，この場合はその性差が細長児にあらわれてくるように思われる。すなわち男子にあまり好まれない食品は，細長児ではむしろ好まれるという傾向がうかがえた。

根菜類，いも類ではじゃがいもが女子の細長児で好まれない傾向がみられるだけで，その他については男女とも著るしい差はみとめられなかった。

うり類，果菜類，香辛料および嗜好品については第8表に示す通りである。

うり類では男子の場合，三群間でほとんど差異はみとめられなかったが，女子ではかぼちゃが肥満児群で低い値を示した。

第8表　うり類，なすその他，香辛料，嗜好品の嗜好傾向

食品名	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
すいか	4.79±0.42	4.92±0.33	4.56±0.86	4.92±0.28	4.85±0.41	4.93±0.27
メロン	4.42±1.12	4.76±0.65	4.65±0.86	4.72±0.61	4.63±0.66	4.57±0.76
きゅうり	4.05±0.97	4.08±0.98	3.94±0.94	4.21±0.78	4.17±0.72	4.43±0.51
かぼちゃ	3.68±0.95	3.73±1.02	3.89±0.90	3.84±0.94	3.73±0.89	3.00±1.41
トマト	4.53±0.61	4.13±1.16	4.00±1.37	4.44±0.71	4.47±0.65	4.36±0.93
なす	3.42±1.12	3.47±1.29	3.55±1.39	3.60±1.12	3.62±0.81	3.49±1.54
ピーマン	3.47±1.17	3.22±1.51	3.24±1.56	3.04±1.17	3.29±1.30	3.57±1.55
わさび	3.53±1.22	3.74±1.02	2.87±1.46	2.57±0.98	3.00±1.11	3.21±1.12
しょうが	3.28±1.32	3.07±1.39	2.69±1.05	2.29±1.00	2.98±1.17	3.38±1.04
コーラ	4.63±0.90	4.46±0.88	4.47±0.80	3.90±1.35	4.31±0.91	4.36±1.01
紅茶	4.53±1.02	4.60±0.69	4.39±0.85	4.28±0.84	4.51±0.73	4.07±1.01
コーヒー	4.63±0.68	4.46±0.88	4.47±0.80	4.04±1.04	4.08±1.06	4.14±1.17
日本茶	4.16±0.96	4.12±1.02	3.76±1.06	3.71±1.00	3.95±0.99	4.07±1.07

果菜類においても男女とも三群間にほとんど差はみられなかった。うり類，果菜類はともに嗜好に性差のみられる食品で，女子によく好まれているものであるが，肉類，乳類，葉茎菜類などのように肥満児あるいは細長児と直接関連するような傾向はなかった。

香辛料は男子では肥満児群の嗜好度が低く，逆に女子では肥満児群において高い値を示した。細長児の場合は女子において低い値を示した。香辛料も性差のみとめられる食品であるが，やはり男女の性別によって異なった傾向がみとめられた。

嗜好品も嗜好に性差のみとめられた食品であり，本調査においてもそれは確認されたが，男女とも三群間には著るしい差異はみとめられなかった。

果物類，海草類および加工品の嗜好傾向は第9表に示される通りである。

果物類，海草類については男女とも三群間に全く差異はみとめられなかった。

加工品については，男子の場合三群間にほとんど差異はみられなかったが，女子の場合では肥満児が普通児に比べて低い嗜好度を示した。これは第5表における肉類の場合と同じような傾向であった。ハム，ソーセージ，かまぼこなどが動物性食品という概念から考えると当然のことと思われる。

以上，食物の嗜好傾向について検討してきたが，細長児および肥満児とも男女の性差によりかなり異なった傾向を示すことがわかった。そして，それは嗜好に性差のみとめられる食品と関連があるようである。すなわち，すこしの例外はあるとしても，大体の傾向としては男子に好まれる食品特に肉類，乳類などでは男子の肥満児群は他の群に比べて高い嗜好度を示し，女子の肥満児群では逆に低い値を示した。一方，女子に好まれる食品特に葉茎菜類では男子の細長児群が他の群に比べて高い嗜好度を示す傾向がうかがわれた。このように細長児および肥満

第9表　果物類，海草類，加工品の嗜好傾向

食品名	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
いちご	4.89±0.31	4.92±0.28	4.67±0.84	4.84±0.55	4.87±0.34	4.79±0.58
なし	4.95±0.23	4.88±0.37	4.72±0.57	4.92±0.28	4.83±0.38	4.71±0.61
ぶどう	4.84±0.50	4.90±0.30	4.83±0.51	4.84±0.37	4.85±0.36	4.79±0.43
みかん	4.83±0.38	4.80±0.48	4.72±0.75	4.96±0.20	4.83±0.38	4.86±0.53
バナナ	4.74±0.56	4.65±0.82	4.94±0.24	4.56±0.77	4.50±0.75	4.50±0.85
もも	4.89±0.46	4.70±0.65	4.78±0.73	4.68±0.56	4.67±0.66	4.64±0.84
りんご	4.68±0.48	4.58±0.67	4.67±0.69	4.52±0.59	4.55±0.57	4.57±0.65
かき	4.63±0.60	4.55±0.79	4.39±1.04	4.48±0.87	4.65±0.61	4.50±0.76
のり	4.68±0.58	4.50±0.95	4.39±0.78	4.56±0.65	4.42±0.72	4.43±0.76
わかめ	4.00±0.88	3.97±1.13	3.89±1.08	4.12±1.01	4.12±0.65	3.86±0.95
ソーセージ	4.42±0.69	4.48±0.75	4.50±0.95	4.32±0.78	4.42±0.67	4.21±0.80
ハム	4.47±0.61	4.32±0.91	4.50±0.62	4.28±0.84	4.40±0.74	4.00±0.78
かまぼこ	4.11±0.96	3.88±0.98	3.82±1.13	4.17±0.76	4.15±0.86	3.86±0.95

児は男女の性別によるちがいはあるが，特定の食品については一定の嗜好傾向があるように思われた。

つぎに調味法のちがいによって嗜好の傾向に差異があるかどうかをしらべた結果は第10表に示された通りである。

第10表　調味法別の嗜好傾向

調味法	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
甘味	3.31±0.62	3.72±0.49	3.87±0.61	3.67±0.50	3.42±0.81	3.61±0.66
油味	3.63±0.70	3.80±0.53	4.27±0.49	3.71±0.62	3.75±0.77	3.78±0.56
酢味	3.06±0.83	2.81±0.59	2.93±0.60	2.95±0.72	3.12±0.71	2.94±0.98
マヨネーズ味	3.88±1.02	3.95±0.96	3.87±0.82	3.81±0.88	4.11±1.04	4.28±0.63
ケチャップ味	4.00±0.81	4.13±0.63	4.20±0.91	3.76±0.85	4.07±0.79	4.11±0.46

第10表によれば，全体的な傾向としては細長児群では低い値を示し，肥満児群においては高い値を示したが，はっきりと有意差がみられたのは男子における油味のみであった。すなわち，味付けのちがいによる好き嫌いは，油料理に対する男子の嗜好に差異があるだけで，その他については明確なちがいはみとめられないようである。

7　性格との関連

肥満の原因として情緒的問題に起因する心理的な面が存在することは，それがどの程度の割合を占めるかについてはいろいろ議論があるが，おほかたのみとめるところである。また，特定の子供を肥満させる心理問題とは別に，肥満はそれ自体子供の行動と情緒生活および対人関

第11表　性格特性のY．G．得点

性格特性	男子			女子		
	細長児	普通児	肥満児	細長児	普通児	肥満児
D	3.50±2.37	3.78±2.09	4.07±2.43	4.00±1.77	3.27±2.23	3.08±1.85
C	2.44±2.12	3.27±1.86	3.33±1.74	3.81±1.91	3.36±1.73	2.83±2.15
I	2.38±2.47	2.54±2.02	2.80±1.76	3.38±2.03	2.38±1.95	3.00±1.91
N	2.88±2.23	3.30±2.24	3.73±1.91	3.69±2.26	3.13±1.70	2.42±2.14
O	3.44±2.12	4.16±1.69	3.60±1.93	4.00±1.94	3.18±1.60	2.92±1.75
Co	2.69±1.61	3.19±1.95	3.27±1.53	2.44±1.77	2.13±1.88	2.08±1.95
Ag	5.19±1.94	5.32±1.24	5.20±1.47	5.25±1.17	5.00±1.52	4.92±1.04
R	4.69±1.76	5.16±1.66	4.93±1.29	4.56±1.84	4.85±2.04	5.08±2.07
G	3.63±2.12	3.41±1.87	3.13±1.96	2.94±2.11	3.21±2.04	3.17±1.91
T	3.81±2.32	3.84±1.93	3.07±2.38	4.06±1.48	3.33±1.70	3.08±2.38
A	4.63±2.34	4.68±1.85	3.67±1.36	3.38±1.83	4.31±1.70	4.50±2.40
S	5.13±2.26	5.08±1.94	5.33±2.02	4.69±1.86	5.85±1.75	5.33±1.94

係に影響をおよぼすとも云われている。そこでこれらの関係をみるために，Y—G検査をおこなってその性格特性との関連をみた。その結果は第11表に示される通りである。

前報[3]においては，食物の嗜好傾向と性格特性の間にはかなりの相関関係があることを報告したが，今回の調査では体型のちがいによる性格特性の差は，男子，女子いずれにおいても明瞭な関係はみとめられなかった。すなわち，平均値だけから考えると情緒安定性因子に属するD，C，I，N，社会的適応性因子のO，活動性因子のT，外向性因子のAなどにおいて，細長児あるいは肥満児がそれぞれ低い値あるいは高い値を示し，さらにこの傾向は男女別によって逆の傾向を示したが，いずれの場合においても有意性がみられなかったので，確たる考察は不可能である。このように本研究においては，体型別ならびに性別による性格特性のちがいは明らかでなく，したがって食物嗜好との関連もみとめられなかったが，先天的肥満児と8才以後の肥満児との間には性格特性にかなりのちがいももるという報告[9]などもあるので，今後さらに対象を広げて検討したいと思う。

Ⅳ　要　　約

細長児および肥満児についてその食生活を中心に実態を調査し，食物嗜好と性格との関連を検討した。その結果を要約すると次のようである。

(1)　松江市の調査対象小学校における肥満児および細長児の出現率はそれぞれ1.63%および1.57%であった。

(2)　両親の体型との関連については，肥満児の場合男女とも母親の肥満が児童に大きな影響をもたらしていることがみとめられた。細長児については親子の間に相関はみられなかった。

(3)　肥満児には偏食が非常に少なかった。一方，細長児は普通児のそれと比べて，ほとんど差異はみとめられなかった。

(4)　主食の摂取量は男女とも肥満児群で高いレベルを示した。細長児群は普通児群とほとんど同じであった。

(5)　間食は最近の傾向として飲物類，果物類が大部分を占め，従来のカロリー補足という意味からすくなっているように思われた。

(6)　食物の嗜好傾向については細長児および肥満児とも男女の性差によりかなり異なった傾向を示した。そして，それは嗜好に性差のみとめられる食品と関連があるようであった。

(7)　体型別による性格特性の相異は，はっきりとはみとめられなかった。したがって，食物嗜好との関連も明らかではなかった。

最後に，この調査のために種々のご便宜を計っていただいた松江市立津田小学校，城北小学校および内中原小学校教官各位に深甚の謝意を表します。

参　考　文　献

(1) 中山郁子，藤江奏；島根大学教育学部紀要（人文・社会科学編），**4**，51（1970）
(2) 中山郁子，藤江奏；同上，**5**，15（1971）
(3) 猪野郁子，藤江奏；同上，**6**，1（1972）
(4) 松岡弘；肥満児（帝国地方行政学会），27（1970）
(5) 松岡弘；学校保健研究，**11**，502（1969）
(6) 平田欽造；体育の科学，**18**，226（1968）
(7) 文部省大臣官房保健課；学校保健研究，**11**，494（1969）
(8) Jonson et al ; Am. J. Clin. Nutr., **4**, 231 (1956)
(9) 松田岩男他；保健の科学，**11**，527（1968）
(10) 杢野帯治，名古屋市立大医学会誌，**16**，1180（1966）
(11) 石河利寛；保健婦雑誌，**23**，31（1967）